〔第一部〕

「戦争終結に導くのに倫理的で人道的な選択肢が他にあったことは

当時でも明白だったのにもかかわらず、原子爆弾が使用されてしまいました。

その悲劇に対して許しを請うのが、私の一生のテーマなのです。」

“The use of such a weapon is a new crime against human culture.”

上智大学名誉教授　（Rev. Fr. Robert M. Deiters, SJ）

ロバート・ディータース師

ザビエル大学から海兵隊に、海軍日本語学校へ、
そしてイエズス会宣教師として敗戦国日本へ

イエズス会会員　カトリック司祭　米国オハイオ州出身
1924 年 11 月生（インタビュー時 94 歳）

インタビューの経緯

2018 年 11 月 15 日に上智大学戦没者記念植樹式典が挙行された。式終了後 6 号館のソフィアンズクラブでの懇親会で、ディータース師は「太平洋戦争中に日本語学校で『桃太郎』を読んで日本語を勉強した」というエピソードを披露した。同席した著者（英語教師）がその日本語学習体験に興味を覚え、お話を伺いたいとインタビューを申し込んだ。翌 2019 年 3 月 4 日、SJ ハウス応接室で 1 時間半のインタビューが実現した。ま

たその後、発表直前まで数度のメールで情報と説明が追加され、著者はディータース師のミッションについても知ることになった。

敬称略。インタビュー、訳責共に上智大学言語教育研究センター所属、篠田愛理

（四枚の写真は全てディータース師提供）

ディータース師は太平洋戦争開戦後３年目の 1943 年から海兵隊員として軍務に服し、諜報戦に備えるべく 1945 年春に米国海軍日本語学校（US Navy Oriental Language School）に入校した。

同年 8 月に戦争が終結したため、戦時という非情な環境下に４か月の集中で築いた日本語の基礎を活かして実際に戦場で通訳官として活躍する機会はなくなった。終戦の年の年末に退役し、司祭職への召し出しに応えて翌年２月にイエズス会シカゴ管区に入会した。ローマ本部からの要請で日本宣教の招きに応じ、1952 年に来日した。 日本到着後から上智大学理工学部で、国内外の電子電気工学界で、そして多岐にわたるミッションでほぼ 70 年間日本語を駆使して献身してこられたことは、ソフィア・ファミリーには周知の事実である。

2018 年に司祭叙階 60 周年を祝い、翌 2019 年 11 月 26 日に上智大学を訪問した教皇フランシスコから、95 歳の誕生日の特別な祝福を SJ ハウスで受けた。

第Ⅰ章 ザビエル大学から海兵隊員に

太平洋戦争開始の翌年の 1942 年初秋、地元オハイオの州都シンシナティにあるイエズス会系のザビエル大学に入学した（Xavier University、創立 1831 年）。大学は生家から１時間のドライブと近く、18 歳の誕生日前のディータース青年は、学生寮ではなく家から通学することができた。工学専攻が希望だったが、当時ザビエル大学でオファーされていたのは基礎科目のみだった。同大も後述のノートルダム大学（創立 1842 年）も上智大学との長年の交換留学プログラムがある。当時米国ではカトリック、プロテスタントなどキリスト教や、ユダヤ教の神学生のみが兵役を免除されていた。第二次世界大戦が始まったことで徴兵登録が 18 歳に下げられ、軍務に適した上級学年の有資格者から次々と入隊していった。当時総数 2,000 人程で小規模のザビエル大学でも学生数が激減していき、１年後に隣インディアナ州サウスベンドのノートルダム大学に編成された。

(写真１、1945 年 10 月撮影。海兵隊少尉の軍装で)

米国では、ニューヨーク州ウェストポイントの陸軍士官学校で陸軍将校、メリーランド州アナポリスの海軍兵学校で海軍将校と海兵隊将校を教育していた。しかし、戦時下で動員兵力が増大したことで下級将校の所要人数が増大し、数十もの一般大学で軍事訓練・養成を担当することになった。ディータース青年は翌1943年に徴兵ではなく志望兵として海兵隊（US Marine Corps）に入隊し、予備役将校としての教育を受けることになった。まずノートルダム大学に派遣されたが、工学専攻が可能になり嬉しく思った。戦況悪化まで米国の大学では１学年秋期・春期の２セメスター制度だったものを、間の休暇を短縮して土曜にも授業をし、１学年３セメスターに変更された。電気電子工学と、軍務に必須の軍事訓練を開始したが、速度も上がり、集中教育になった。

工学専攻の全隊員は、その後 1944 年に東部ニューヨーク州イサカのコーネル大学に１セメスター派遣された。

予備役将校としての訓練開始と同時にアカデミックな講義はなくなり、軍事学のみを集中して学んだ。ある海軍中佐が翌年早春に同大学を訪問し、対日戦の軍務への準備として「海兵隊に combat interpreters（戦場通訳官）が必要になった」として、決めるのに 1 日という即断を求めた。その将校がヒンドマーシュ（Albert E. Hindmarsh、1902-1975?）だったことを覚えている。ハーバード大学出身で国際法学者。東京帝国大学でも教鞭をとり、夏目漱石とも親交があったとの記録がある。それまで日本人に会ったことも日本語が話されるのを聞いたこともなく、日本について何も知らないという状況だったが、この点で他の候補の多くと同じだったのだろう。外国語の単位は工学専攻には必須ではなかったが、イエズス会系のザビエル高校でラテン語を 4 年間、ドイツ語を 12 単位取得していた。その学習歴から手を挙げ、他の数名と即採用された。武田（後述）によると、戦場通訳官には日本か中国生まれないしは育ちで、日本語・中国語の学習体験がある学生が優先的に募集されたとある。しかし 1945 年時点で極東言語の学習体験者はごく少数に留まり、やむなく欧州言語学習体験者の採用につながったのだろう。

第 II 章 海軍日本語学校へ

米海軍極東言語学校（US Navy Oriental Language School）は、太平洋戦争までカルフォルニア州中部のモントレーにあった。真珠湾攻撃の後それまで太平洋岸に在住していた 12 万人もの日本人移民と、その 3 分の 2 の市民権を有する米国生まれの日系二世たちは「敵性外国人」とみなされることになった。翌 1942 年 2 月にルーズベルト（Franklin D. Roosevelt、第 32 代大統領、1933-45）の大統領令 9066 号により、内陸のマンザナーはじめ強制収容所 10 か所に収監された。それに伴って日系二世の教師たちも移動することになり、日本語学校は同年 6 月にデンバーのコロラド大学に移転した。ディータース師は 1945 年コロラドで入校し、4 月から日本語集中学習を開始した。しかし、米軍の戦況は前年 1944 年にすでに優位に転向していて、尉官クラスの下級将校の人数を増加する必要はなくなっていた、との記録がある。

集中日本語学習はすべて少人数クラスで、各ユニットに 5 人ほどが在籍した。会話クラスでまず「おはようございます」を習ったが、「おや、出身地オハイオと同じ発音ではないか」と思った。昼食は毎日教師と一緒で、日本語オンリーだった。主に先生が話しかけたが、生徒たちは聞き手に徹することが多かった。ディータース師の説明によると、いうなればすべて「Cold Shower Method だった」そうである。これは外国語教授法の正式名称ではないが、有無を言わせず厳しい学習環境に放り込み、生徒がやる気を出したり達成感を感じたりするような学習ペースは想定外、というものだったのだろうと想像する。当時の教授法が後日詳しく説明されたが、とにかくプログラム開始直後から常時高速、かな・漢字で書くことと行書・草書を読み取ることが徹底された。文法や統語論の説明は不十分なまま、読解、リスニング、会話訓練すべてが進行した。教科書としては、戦前在京米大使館付き外交官の言語訓練用に編纂された長沼直兄著『標準日本語讀本』が主に使用された。

（『標準日本語讀本』シリーズは長沼スクール創立者の長沼直兄（1894-1973）の代表的な著作であり、入門から超上級までの全 7 巻からなる日本語教科書だった。初級で基本文型を学習後、中級以降は文学作品・落語・日本事情、平安時代や江戸時代の文化・日本政府の仕組みなどもテーマとして取り上げられており、日本について一通りのことが学べる内容になっていた。…ウィキペディアより）

カリキュラムは月曜から土曜の週 6 日、午前中 4 時間の授業、午後は会話練習に当てられた。初級に 3 週間かけた。前日学んだ内容をもとに適切な表現を正確な発音で話す訓練と、教師が読み上げる文を全員黒板の前に出て書き取る訓練が繰り返された。入門レベルはローマ字表記だったが、ひらがな・カタカナを 1 週間でマ

スターし、次のクラスでディクテーション――聴き取ったパッセージの書き取りテスト――が出た。一日の終わりに教師は翌日のレッスンを前もって読み上げた。予習も厳しく、翌朝のクラスで読解、教師と生徒間の質問・答えが出、毎土曜朝のクラスで書き取りと会話テスト二つという詰め込みの毎日だった。長い一日の後夜 2 時間の復習が義務づけられた、との記録がある。急務を要する戦時のカリキュラムであり、行書・草書で書かれたかな・（旧）漢字も読み取って書き取る訓練は受けたが、「正しい書き順で美しく書く訓練を受ける余裕はなかった」そうである。そのうち取り組んだ単文の英日翻訳も、かなと習った漢字まじりで行った。到達はしなかったが、『長沼讀本』最終巻の内容は漢文と文語体の学習だったと記憶している。

全課程は 14 か月で終了するはずだった。武田によると「開校当初の目標は、1 年間の訓練後、漢字二千字の読み書き、日本語の話し言葉八千語の習得、日本語の新聞の読解、日本語ラジオ放送の発信と傍受、活字及び草書による日本語文書の翻訳ができることだった。…（しかしこれは）日本という環境の中で 3 年かけて学ぶことを前提に作成されたものだが、同じ内容を日本人のいない環境下わずか 1 年で詰め込むという極めて高い目標が掲げられた（p. 62）」。また「一期生たちは、同プログラム終了時には予備役将校になれることが約束されていた」とあり（同上）、この「海軍訓練プログラムの中で最も酷烈な知的プログラム」‘…the most intellectually rigorous of Navy training program’ に対し、言語官候補たちは「不撓不屈の決意と力量」’dogged determination and skill’ で応えた、と他資料にある。日本語学校で訓練生は軍事訓練を免除されていたが、ディータース師は「それは日本語学習以外の訓練が全く不可能だったから」と説明した。

教材として何が使われたのかという質問には、まず「桃太郎」や「浦島太郎」などの昔話から始め、学習が進んだ後戯曲『父帰る』（菊池寛著、1917 年）などの文学作品も読んだと答えた。個々の学習者のレベルと学習速度に合わせるために『長沼讀本』は 1 巻ずつではなく個別に使用された。学習中に米国人として面白いと感じたエピソードもあった。「席を外す（to leave/quit one’s seat）、しばらくその場を離れる・中座する」という表現だが、最初は意味が分からなかった。英語で seat は椅子の座の部分であり、「seat を取り外す」としか思えず、そのギャップがユーモラスに感じられた。「活動写真」という言葉を習ったことも思い出すが、当然軍事用語・海軍用語もあり、「駆逐艦」や「航空母艦」なども覚えた。

指揮官となる将校数の増加と日本語言語官の育成が急務であるとして、募集は何度かあり随時入校、進度によってクラス編成も数回あった。だが、膨大な学習量と高速の集中講義についていけずに進級できない生徒も出た。毎月の平均点の合計が低いままに留まり一定目標に到達しない訓練生は 4 週間ごとに去り、海兵隊の他部隊に再配置されていった。落伍者は多かったが誰がいなくなったかは後まで分からず、結果クラス意識はそれほど強くなかったと思う、と語った。戦後日本文学研究者・翻訳家になった 3 歳年上のドナルド・キーン氏（Donald Keene, 1922-2019）が海軍日本語学校出身だったということを、ディータース師は後年知った。「私は日本語学校の 2 期生で海軍大尉だった」と、あるインタビューで話していたとの情報がある。同じく『源氏物語』全巻英訳で知られる元海兵隊員のサイデンスティッカー氏（Edward G. Seidensticker、1921-2007）も海軍日本語学校出身で、言語担当官として戦地に派遣され、その後外交官に、そして日本文学研究に進んだ。しかし、サイデンスティッカー氏が 1950 年代中頃にヨゼフ・ロゲンドルフ師（1908-1982）に招かれて数年間上智大学で教えたことは、著者が国際教養学部(FLA)で翻訳クラスを教えながら 2018 年にようやく知ったことである。

日本語を一から教えた教師にはどんな人がいたのかという質問に対しては、数名を挙げた。一人は名字を忘れたがジミーという当時 40 代の「帰米」――日本で学校教育を受けた後に米国に戻り、日本語・英語同レベルのバイリンガルになった日系二世――で、東京帝国大卒であることを鼻にかけていたとの記憶がある。ちなみに、ディータース師は 1968 年に東京大学から電子電気工学博士号を授与されている。サイトウという名字だけを覚えているが、20 代半ばの若い日本語教師もいた。前日に教えられた教材を完璧に学んでいなかった一人の生徒が翌朝のリーディングで詰まり、二人目、そして三人目も同様に読むことができなかったことがあった。クラスの誰も十分に復習していなかったことがついに明らかになった瞬間、なんと驚いたことにこのサイトウ先生は学生の前で泣き出してしまった。それに対し、「（せいぜい二十歳や 21 歳の生徒たちの前で）先生の方が泣き出すとは！こんな人種がいるのか」と驚いた（インタビュー中、これのみが日本語だった）。できない生徒の方が泣くのなら理解できるが、教師の方が泣くなどありえない、と感じたのだろう。それに比べ、ディータース師が「心理的プレッシャーを感じることはなかった」そうである。

日本語学校は教師数の不足を補うために、外国語教授法の専門でなくても高等教育を受けたバイリンガルなら医師、弁護士、教師などのプロフェッショナルも雇い入れたようである。華道の師範の中年女性もいたが、その日のレッスンから脱線して生け花について英語ではなく日本語で説明してくれた。自分たちの祖国日本で教育を受けさせたいと米国生まれの子供たち全員を次々送り帰した教育熱心な一世がいたことについては、当時すでに聞いていた。訓練生らはみな親切な教師たちに好印象を持ったが、担当が次々代わるために教師と個人的に親しくなる時間的余裕はなかった。まず日本語を通して日系米人に好感を抱くようになった。

一、二度だけだったが、50、60 代の白人教師から日本語を習うことがあった。横浜で関東大震災（1923 年）に遭遇し、地震を体験したことのない米国人にその惨状を話してくれた。あるできごとの全容を初級レベルであってもすべて日本語の説明で理解できた体験は、それが初めてだったと思う。その教師は戦前の日本で宣教師として働いていたそうである。ある統計によると、1942 年から 1946 年まで総勢 1,650 名が日本語学校に学んだが、177 人の日系人教師だけでは当然足らず、日本ないしは中国生まれ、その後現地で育ったバイリンガル、ないしは多言語使用が可能な白人米国人も十数名採用された。明治学院（開学 1887 年）などプロテスタント系ミッション・スクールの戦前の教師、東京帝国大学の英語教師の息子で日本生まれ・日本育ちの米国人や、同じく日本育ちで日本語が流暢なビジネスマンの息子も含まれていた。

第 III 章 8 月 6 日の号外

米中部標準時間の 6 日午前、言語官候補の若い海兵隊員たちが 10、15 分の休憩を芝生の上で過ごしていた時だった。新聞配達の少年が “Extra, Extra!” と叫びながら号外を配りにきた。それには“New Bomb Destroys Hiroshima”と見出しが躍っていた。教師の中には広島で子供時代を過ごした帰米が多く、どんな思いでそのニュースを聞き、号外を読んだのだろうか――語学兵らは胸を痛め、米軍の勝利を喜ぶことなどは到底できなかった。壊滅した広島の惨状を想像して二世教師たちは嘆きを押し殺したのだろうと、その慟哭と混乱に思いを馳せた。教室に戻る時になっても、誰も親族の安否などを尋ねることはなかった。

太平洋戦争開戦翌年の 1942 年にザビエル大学に入学した後、ギリシャ語・ラテン語古典文学の教授のロレンス・ヘンダーソン師の読書クラブに入った。ヘンダーソン師は 20、30 歳年上だっただろうか。プラトンの『国家』などを原著で読んで英訳もしたが、工学希望だったので教授のクラスを取ったことはなかった。しかし、ザビエル大学を去って海兵隊員としてノートルダム大部隊に派遣された後、一家に招かれて訪問した神父に休暇中に会っ

たり、転校先から文通を続けるなどして交流が続いていた。8 月 6 日から数日して受け取った手紙には、次のように認めてあった。 “I told the students at the morning Mass, ‘With this bomb, America lost the war.’”（「原爆投下によって、米国は――道徳的な意味で――戦争に敗北した」と、ザビエル大学生寮の朝のミサで説教した。）ヘンダーソン神父とは、会うたびに連合国軍によるドイツへの無差別爆撃の非道徳性についてなど議論を重ねた。東部の都市ドレスデンは 1945 年 2 月に市街の 85%が破壊され、数万から 15 万人もの一般市民が死亡したとの記録もある。「戦時における犯罪行為で、いかなる交戦国も敗北したことになる」との解釈で、無辜の一般市民の大量殺戮は犯罪そのものであるとの結論に達していた。ヘンダーソン師以外にも戦時中、そして戦争直後から連合国軍の無差別空襲を毅然と批判した著名な倫理神学者は多数いた。戦争犯罪に反対を表明したそのようなイエズス会員による書籍、記事もすべて手元に残してある。

ディータース師は原爆投下 70 回忌の 2015 年 8 月、イエズス会評論雑誌『アメリカ（America）』にあの衝撃的なニュースを知った瞬間のエピソードと、原爆の倫理的是非についてのオンライン記事を寄稿している。’Bombing Japan: Was It the Only Option?: Revisiting the atomic horrors of Hiroshima and Nagasaki’（原爆投下は唯一の選択肢だったのか？ヒロシマとナガサキの核爆弾の恐怖を再考する）という題だった。その記事に対して、「原爆が終戦を早めた」、「全アジアにおける日本軍の蛮行に対する報いであり、倫理的正義だった」、「原爆投下によって日米双方の死者数を激減させることができた、したがって投下は間違ってはいなかった」など、知識人を含む米国内外の読者から数多くの賛否両論が延々と寄せられた。ディータース師はそれらに対して解説と反論を丁寧に書き込んでいる。また、海軍日本語学校で目撃することになった日系教師の悲嘆を忘れることはなく、戦争前夜から長年人種差別に苦しんだ日系米人の苦悩についても思い続けた。修道女の妹が、ある日系家族の苦難の歴史について書かれた本を送ってきたこともあった。**(写真２、1946 年元旦に撮影。少年時代からの友人たちと。二人は兄弟で、兄は陸軍上等兵、弟は海軍三等兵曹）**

太平洋戦争終結により海軍日本語学校での学習は４ケ月で終了し、全課程を終了することも卒業することもなくなった。したがって実際に戦地で、ないしは 1952 年までの７年余の連合国軍占領下の日本で通訳官として活躍する機会もなくなった。ディータース師より一年、あるいは数か月でも早く日本語専門家としての訓練を開始した言語官たちは「通信傍受、暗号解読、日系人コミュニティの監視などに従事」（武田、p. 59）し、捕虜尋問、遺棄された軍関連書類、日本兵が戦場に遺棄した手紙、日記、メモなど私的な書簡の翻訳にも携わった。占領軍の一員として 1945 年 9 月以降に来日した語学兵と日系二世たちは、東京裁判や新憲法草案起草にも深く関わることになった。

第Ⅲ章~第Ⅳ章は〔第二部〕へ続く

インタビュー、訳責共に上智大学言語教育研究センター所属、篠田愛理